

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成 29 年 8 月 7 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人間環境学研究科

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 宇佐美 達朗

助 成 の 種 類	平成27年度・若手研究者在外研究支援・在外研究長期助成	
研 究 課 題 名	シモンドン哲学における技芸の問題:発生的百科全書主義の研究	
受 入 機 関	パリ西大学(パリ第10大学)	
渡 航 期 間	平成27年9月1日～平成28年8月31日	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )	
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	3,000,000円
	使用した助成金額	3,000,000円
	返納すべき助成金額	0円
	滞在費:3,000,000円	
	助成金の使途内訳	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 採択後の手続きが簡便で、滞在中は研究に専念することができました。 また、助成金が一括で振り込みされるので、渡航に関する手続きがスムーズに進みました。	

報告者は平成 27 年度の在外研究長期助成をうけて、フランスのパリ第 10 大学（パリ西大学、現在はパリ・ナンテール大学に改称）の哲学科 Master 2 課程に登録するかたちで 2015 年 9 月からパリで在外研究を行ないました。当初は 2016 年 8 月までの滞在予定でしたが、さまざまな状況から滞在期間をさらに一年延長し、2017 年 6 月に Master 2 課程を修了することとなりました。以上のような事情から、ここでは基本的に 2015 年度の成果について報告しますが、部分的に 2016 年度の事柄についても述べたいと思います。

発表者は、個体化論と技術論で知られる二〇世紀フランスの哲学者ジルベール・シモンドンについて研究を行なっています。主著となる博士論文が長らく不完全にしか出版されなかったこともあり、シモンドン研究は近年に至るまでほぼ未着手であったと言ってよい状況でした。現在では、完全版の出版に前後してフランスでいくつかの研究が発表され、それに続くかたちでイタリアや、さらには英語圏などでも研究が進みつつあるようです。とはいえその中心地は依然フランス、特にパリにあり、実際、パリ（周辺）では不定期にシモンドンをめぐる会合などが開催されています。報告者の在外研究の目的は、こうした状況に実際に身を置いてみることにありました。これは、さらに次の三つに大きく分けることができます。

(1) 文字情報などでは知ることの難しいシモンドン研究の動向を知り、さらには現地の研究者と交流すること。(2) Master 2 論文として、フランス語で自身の研究をかたちにすること。(3) 現地図書館などでの資料調査・収集。この三点について以下でその概要を述べたいと思います。

(1) 不定期に開催されるワークショップ「アトリエ・シモンドン」への参加によって、シモンドン研究を主導しているジャン＝ユグ・バルテレミー、ヴァンサン・ボンタン両氏と知り合うことができました。また、2015 年度末にパリ第八大学（サン＝ドニ）にて行なわれた両氏の主催の会合では、若手を含む各地のシモンドン研究者の発表を聴講する機会に恵まれました。そこでの大雑把な印象としては、日本ではどちらかといえばシモンドン哲学の理論的・原理的な部分を特に突き詰めていく傾向がみられるのに対して、フランス語圏ではむしろ具体的な他分野におけるシモンドン哲学の可能性を探っていく傾向があるように思われました（もちろんこれはフランス語圏に理論的な研究が欠けていることを意味しません）。

(2) 報告者は、2017 年 6 月にパリ第 10 大学のエリー・デューリング准教授の指導のもと「シモンドンにおける類比の働きとその形而上学的前提」と題した Master 2 論文を提出し、同大学のアンヌ・ソヴァニャルグ教授を副査に迎えた口頭審査を経て、Master 2 課程を修了するところとなりました。両氏からは、この論文で示された研究方針の確かさを評価され、

今後のさらなる展開を大いに励まされました。なお、タイトルからわかるように、最終的に Master 2 論文で扱われるテーマは採択時の課題と異なるものとなりましたが、シモンドンのとった方法論に光をあてる基礎的な研究であるという点で、採択時の課題のみならず、今後進めていく研究全体にとって重要なものとなったと言えます。

こうした Master 2 論文そのものに対する評価とは別に、まとまった分量のフランス語を、論文としての構成を意識しつつ書き上げたことは、フランス語での有効な議論の組み立て方を学ぶという点でも、レポート執筆および筆記試験（パリ第 10 大学では前期 5 コマ、後期 3 コマのそれぞれについて、10 枚程度のレポートと 2 時間から 4 時間の筆記試験が課せられました）以上に、報告者にとって得難い経験となりました。

(3) シモンドンがみずからの哲学を形成していったのは 1950 年代であり、それゆえその思想的な背景を探るには 1950 年代以前の哲学や科学の文献調査が必要となります。こうした文献は、今も広く読まれ再版されているのであればよいのですが、戦前や戦後に出版され、そのまま絶版となっているものが多いというのが実情です。報告者は古書で入手可能なものについては書店などで購入し、そうでないものについてはフランス国立図書館などで調査・複写するなどしました。そこで入手した資料の詳細な検討はこれからの課題ですが、シモンドン哲学の形成とも関わりの深いフランスにおけるサイバネティクスの初期受容についてはさらなる調査の必要性を感じています。

報告者の滞在したパリは、いくつもの高等教育機関を抱え、それゆえ各国からたくさんの留学生を迎え入れている都市です。このことは、シモンドン研究という枠組みを超えて報告者にとって大きな意味を持ちました。さまざまな関心をもつ学生との交流はもちろん、毎週のように開かれている特別講演やシンポジウムなど、多くの機会で見聞を広めることができたからです。とりわけ、2016 年 10 月に四日間にわたって行なわれた国際コロク「Choses en soi」では、現代哲学における実在論的な傾向と、それに対するフランス哲学の多種多様な反応を目の当たりにすることができたのは、特筆に値する経験であったと言えます。

以上のように、パリでの長期滞在とそこで得た成果は、申請者の今後の研究生活を大きく決定づけるものとなりました。貴財団による多大なご支援に感謝の意を表します。